

箴言28-31章「知恵にある誉れ」

1A 正しい者と悪者の確執 28-29

1B 穴に陥る人 28

1C 英知に欠く王 1-16

2C 富に急ぐ人 17-28

2B 正しい裁き 29

1C 寄る辺のない者への擁護 1-14

2C 僕への訓練 15-27

2A 王の得た教訓 30-31

1B 分をわきまえた知恵 30

1C 御言葉への信頼 1-6

2C へりくだり 7-14

3C 四つの格言 15-33

2B 母からの言葉 31

1C 女と酒 1-9

2C しっかりとした妻 10-31

1D 収益 10-27

2D 誉れ 28-31

本文

箴言 28 章を開いてください。28 章は 25 章からの続きです。25 章において、ヒゼキヤの時代にソロモンの箴言を書き写したものであることが書かれています。ソロモンの箴言なのですが、ヒゼキヤが王として正しく治めるため、知恵をもって治めるための格言として残したかったのでしょう。

1A 正しい者と悪者の確執 28-29

1B 穴に陥る人 28

1C 英知に欠く王 1-16

28:1 悪者は追う者もないのに逃げる。しかし、正しい人は若獅子のように頼もしい。28:2 国にそむきがあるときは、多くの首長たちがいる。しかし、分別と知識のあるひとりの人によって、それは長く安定する。28:3 寄るべのない者をしいたげる貧しい者は、押し流して食物を残さない豪雨のようだ。

正しい統治についての興味深い格言です。1 節にあるように、正しさの中に生きている人は、やましいところがないので隠し立てしないので、公正明大でいられます。けれども何か悪いこと、負い目を持っている人は、こそこそと裏で何かをしたり、あるいはいろいろな派手に動いてみたりして、自分の言っていることの実体がないことを隠します。自信を持っていないからです。そして国のレベルでは、そ

の不安定な状態が、首長が出てきては降ろされる繰り返しという形で現われます。北イスラエルの末期がそうでしたし、南ユダの末期もたくさんの王が現れました。

そして3節は、分別のない貧しい人の例です。その貧しさのゆえ、心を歪め、その心のままで一たび、富や力を得れば、それを自分の益のためだけに用いることになります。社会的に疎外された人が、例えば神学校に行き、教会の牧師になったとして、もしその疎外がイエス様との出会いをもたらした神の豊かな恵みをもたらしたのであれば、それは同じように疎外されている人に手助けをする器になるでしょう。けれども、その反対にその疎外感を教会の中で満たそうとして、かえって教会の人々に混乱と被害をもたらす、ということがあります。

28:4 おしえを捨てる者は悪者をほめる。おしえを守る者は彼らと争う。28:5 悪人は公義を悟らない。主を尋ね求める者はすべての事を悟る。28:6 貧しくても、誠実に歩む者は、富んでいても、曲がった道を歩む者にまさる。28:7 おしえを守る者は分別のある子、放蕩者と交わる者は、その父に恥ずかしい思いをさせる。28:8 利息や高利によって財産をふやす者は、寄るべのない者たちに恵む者のためにそれをたくわえる。28:9 耳をそむけて教えを聞かない者は、その者の祈りさえ忌みきらわれる。

教えを守るか、捨てるか、二種類の人を挙げています。4節ですが、私たちはとにかく、人を恐れるあまり、悪いことをしていると分かっているか、かえって庇おうとします。これは、教えを捨てることです。たとえ葛藤が起こっても、悪は悪としていく必要があります。そこで確執が起こります。しかし、その確執は神の教えに従おうとしているから起こっていることであって、愚か者の行なう争いとは全く異なること、むしろ正反対のものです。したがって、5節において悟りについての真実が書いてあります。同じものを見ているか、悪い心になっている人は見えるものが見えません。悟ることができません。けれども、主を尋ね求めている人は、一体何が起こっているか、ことさらに説明を受けなくても悟ることができます。

6節は、先ほどの貧しい人とは異なり、そのような境遇の中で、真実に主との出会いをした人の例です。むしろ、貧しさや試練の中で、品性が練られて正しいことをやり遂げようとしています。けれども、7-8節は富が与えられると、その富に支配されてしまう人の例です。放蕩者、つまり与えられた財産をしっかりと管理せずに、使い放題してしまうこと。また利息や高利によって、自分の手を動かさずに財産を増やそうとすること。このような愚かさが人の心にはありますが、神は必ず、そうした不公正な富の分配を貧しい者に届くようにする御心を持っておられます。そして9節ですが、どんなに祈りを捧げていても、教えを聞こうとしない人の祈りは、神は聞かれません。

28:10 正直な人を悪い道に迷わす者は、自分の掘った穴に陥る。しかし潔白な人たちはしあわせを継ぐ。28:11 富む者は自分を知恵のある者と思い込む。分別のある貧しい者は、自分を調べる。28:12 正しい者が喜ぶときには、大いなる光栄があり、悪者が起き上がるときには、人は身を隠す。

28:13 自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。28:14 幸いなことよ。いつも主を恐れている人は。しかし心をかたくなにする人はわざわざに陥る。

10 節は、先ほどの安定性に関わります。悪い道に迷わす人は、どんなことをしていても、結局はその迷わした中に自分も入っていきます。主にあって歩んでいこうとする人を、自分自身に引き寄せられるためにいろいろやって、その人が主から離れてしまったとします。けれども、自分自身も信仰から離れ、健全な教えから離れていってしまうのです。そして11 節ですが、豊かさの中で自分が賢いとおごってしまうところ、貧しさの中で知恵を学び、自分を調べるようになります。私たちが、ある時に自分のものが取られてしまった、そのような時に主が語られている声に耳を傾けることができるのです。

12 節ですが、1 節と原則は同じです。正しい者であれば、公正明大になれます。けれども、悪いことをしていると、人々は隠れるようになります。本当に正しいことをしてれば、隠れる必要はありません。けれども、光に、神の栄光に、正しさの中に照らされては困るので、隠すしかないので。そしてそうした悪いこと、負い目のあることをしている人にも希望があります。13 節で、その背きの罪を告白すればよいのです。隠すのではなく、言い表すのです。そうすれば主は憐れんでくださいます。私たちは、神は罪を告白する者を赦し、その罪を覆ってくださることを前回学びました。こうして主を恐れることができるのですが、それでも心を頑なにしていたら災いに陥ります(14 節)。

28:15 うなる雄獅子、襲いかかる熊、寄るべのない民を治める悪い支配者。28:16 英知を欠く君主は、多くの物を強奪する。不正な利得を憎む者は、長生きをする。

強奪する王、支配者はいますが、いつまでも長らえるのは不正な利得を憎む者です。

2C 富に急ぐ人 17-28

28:17 流血の罪に苦しむ者は、墓まで逃げるが、だれも彼をつかまえない。28:18 潔白な生活をする者は救われ、曲がった生活をする者は墓穴に陥る。

1 節、「悪者は追う者もないのに逃げる。」と同じです。自分の犯したことで良心の呵責を覚え、それを自分が死ぬ時、墓まで持っていくつもりです。誰も彼を捕まえていなくても、彼は墓に入るときまで苦しみ続けることになります。しかし、潔白な生活をする人はその反対であり、たとえ苦境に陥っても、必ず救いの道があります。試練と共に、逃れの道があるとコリント第一にもありますね。

28:19 自分の畑を耕す者は食料に飽き足り、むなしいものを追い求める者は貧しさに飽きる。28:20 忠実な人は多くの祝福を得る。しかし富を得ようとあせる者は罰を免れない。

勤勉であること、忠実であることの教えです。これは霊的にも当てはまります。霊的な営みに忠実

である人は、確実にその豊かさに預かれます。その反対に、富を得ようと焦ること、つまり、地味なこと、身近なこと、わずかなことを怠って、大きなこと、目立つことだけをしていけば、必ずその働きは成功しないでしょう。わずかな物から、主は大きなことを任せられるからです。

28:21 人のかたより見るのは良くない。人は一切れのパンで、そむく。28:22 貪欲な人は財産を得ようとあせり、欠乏が自分に来るのを知らない。28:23 人を責める者は、へつらいを言う者より後に、恵みを得る。

今、自分に良くしてくれるからことって、その人は良い人だと言って、えこひいきしたところで、人の心は移り変わりやすいのです。ちょっと他の人にほんの少しだけ良くしてもらえたら、最初の人をいとも簡単に裏切ることもあるのです。そして 23 節ですが、そうした人々の心の移り変わりに振り頼むのではなく、むしろ真実に振り頼む人の姿であります。責めること、つまり神の真実にしたがって、行なっていることは間違っていると指摘すること、これをする人が後に、好意を得ることになります。

28:24 自分の父母の物を盗んで、「私は罪を犯していない。」と言う者は、滅びをもたらす者の仲間である。28:25 欲の深い人は争いを引き起こす。しかし主に振り頼む人は豊かになる。28:26 自分の心に頼る者は愚かな者、知恵をもって歩む者は救われる。28:27 貧しい者に施す者は不足することがない。しかし目をそむける者は多くののろいを受ける。

貪欲の問題です。父母の物を盗むということは、貪りだけでなく、父母を敬えという主の命令に背くことです。そして、争いを引き起こす人というのは、何かを欲しがっているということです。そしてそれは主に信頼していないことの裏返しです(ヤコブ 4:1-2)。自分で獲得しようとせず、主に信頼します。そうしていくと、主の恵みがその人から流れて、それで豊かにされます。そして、自分の気持ちや心の思うままに動くのではなく、思慮深さをもって、知恵をもって判断します。

28:28 悪者が起こると、人は身を隠し、彼らが滅びると、正しい人がふえる。

これは一つの原則のようなものでしょう。悪者と正しい人は相容れないということです。大事なのは、ここでいう悪者とは、自分の知識や知恵を優先させていくことです。それは一見、好ましいもの、良いものに見えるかもしれませんが。サタンがそのように罪を見せましたし、イエス様はペテロに、「下がれ、サタン。あなたは神のことではなく、人のことを思っている。」と言われました。人にとっては良いものに見えるかもしれませんが。その一方で正しい人というのは、神に信頼している人です。ですから神ではなく、人のやり方で推し進めようとする人が出てくると、人々は正しいことを行なえなくなってきました。したとしても、非公式に、穏便に行なわざるをえなくなります。けれども、自分勝手にやっている人がいなくなれば、主に尋ね求めた人々、御心を求めている人々が再び中心的なところに出てきます。

2B 正しい裁き 29

1C 寄る辺のない者への擁護 1-14

29:1 責められても、なお、うなじのこわい者は、たちまち滅ぼされて、いやされることはない。29:2 正しい人がふえると、民は喜び、悪者が治めると、民は嘆く。

1 節ですが、そのまま自分の欠けたところを示されることは、その時は痛いですが、必ず癒しをもたらします。しかし心を頑なに拒むと滅びしかありません。主の備えておられる良き物を得ることができなくなります。そして2 節は、28 章 28 節と同じ原則です。主に信頼する人が増えれば、そこに喜びがわき出ます。そして、悪者が支配的、影響力を持つと、嘆きが増えるということです。

29:3 知恵を愛する人は、その父を喜ばせ、遊女と交わる者は、財産を滅ぼす。29:4 王は正義によって国を建てる。しかし重税を取り立てる者は国を滅ぼす。

父から与えられた財産を放蕩すること、また国に与えられた民から重税を課すこと、どちらも貪りの罪です。主によってそれぞれに与えられている分があるのに、その一線を越えて、度を越して、我が物にしていこうとするのが貪欲の罪です。

29:5 自分の友人にへつらう者は、自分の足もとに網を張る。29:6 悪人はそむきの罪を犯して自分のわなをかける。しかし正しい人は喜びの声をあげ、楽しむ。29:7 正しい人は寄るべのない者を正しくさばくことを知っている。しかし悪者はそのような知識をわきまえない。

5 節、「友人」と「へつらう」というのは相容れない言葉です。友人こそが、苦しい時にも共にいてくれる人であり、友人こそが愛する人ですから、あからさまに責めることもあります。鉄が鉄を研ぐ関係です。ところが、へつらうとは心では違うことを考えているのに、自分の益のために滑らかな言葉を使うことです。しかし、これこそが相手への信頼を引き落とし、相手の心を傷つけ、結局、友人をも失っていく結果に陥っていきます。そして6 節は、同じように悪者は結局、自分の仕掛けた罠に落ち込んでしまうことを取り上げます。ですから、他の箴言において悪を妬んではならないと戒められています、忍耐していればかならず正義が勝ちます。正しい人の特徴はその信仰と、そして喜びと楽しみです。

それから7 節は、寄る辺のない人々に正しい裁きをするというのは、その人たちに目が向けられ、その人たちが主の中に留まることができる正しく導くということまでを含みます。自分のこと、また自分にへつらう人々とだけで固まって、周りの人々、自分とは利害関係のない人々に届く心を持っていないのは悪者です。

29:8 あざける者たちは町を騒がし、知恵のある人々は怒りを静める。29:9 知恵のある人が愚か者を訴えて争うと、愚か者は怒り、あざ笑い、休むことがない。29:10 血に飢えた者たちは潔白な人を憎み、正直な人のいのちをねらう。29:11 愚かな者は怒りをぶちまける。しかし知恵のある者はそれ

を内におさめる。

嘲る者、愚か者が人々に騒ぎを起こし、怒りをぶちまけるけれども、知恵のある者はそれを静め、また内に収めるという箴言です。神の立てられている秩序に対して、それとは敢えて異なる行動を取っていく、それでなるべく自分たちに引き寄せる、騒がせることに愚か者は長けています。そして9節を見ると、知恵のある人々はその過ちを明らかにします。しかし、これは神の秩序を乱すことなのだ、神に従い、神に立てられている人々に従うのだという言うものなら、相手はどんどん責め立て、いかに相手が悪いかを話し、勢いを消すことはありません。それが、あのユダヤ人指導者たちであり、その妬みは、正しい方キリストを十字架に付けるほどのものでした。

正しい人はどのようにして、怒りや騒ぎを静めることができるのか？ここで使われている「静める」はまさに、嵐を静める時に使われるような言葉です。イエス様がガリラヤ湖の嵐を静められたことを思い出します。イエス様は嵐の中で、舟の中に寝ていることさえしました。なぜそんな平静でいられたのか？それは父なる神に対する絶対的な信頼です。御父がこれらのことを全て掌握しておられることに対する安心です。この、父なる神の計らいに信頼して、それで初めて心も正しいところに置くことができます。自分たちで何とかしなければいけないという強い誘惑に対して、主が恵みをもってすべてを掌握しておられるのだと信じることで対抗します。

29:12 支配者が偽りのことばに聞き入るなら、従者たちもみな悪者になる。29:13 貧しい者といいたげる者とは互いに出会う。主は、この両者に日の光を見させる。29:14 誠実をもって寄るべのない者をさばく王、その王座はとこしえまでも堅く立つ。

支配者の責任は重大です。支配者が偽りの言葉を聞けば、それに従う人もその悪いことを行なってしまう。その一方で、寄る辺のない人を助ける王は、神による報いが与えられます。そして興味深いのは、究極の裁き主は神だということです。貧しい人と虐げる人が出会うというのは、神の主権の中で起こっていることであり、「日の光」というのは、後の日に明らかにされるということです。金持ちとラザロがその典型です。ラザロがアブラハムの懷に、金持ちは苦しみのところにいました。

2C 僕への訓練 15-27

29:15 むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる。29:16 悪者がふえると、そむきの罪も増す。しかし正しい者は彼らの滅びを見る。29:17 あなたの子を懲らせ。そうすれば、彼はあなたを安らかにし、あなたの心に喜びを与える。29:18 幻がなければ、民はほしいままにふるまう。しかし律法を守る者は幸いである。29:19 しもべをことばだけで戒めることはできない。彼はそれがわかって、反応がない。29:20 軽率に話をする人を見ただろう。彼よりも愚かな者のほうが、まだ望みがある。29:21 自分のしもべを幼い時から甘やかすと、ついには彼は手におえない者になる。

親が息子に対して鞭と叱責を与えることは、これまで数多く出てきましたが、ここではそれだけでなく、僕に対して主人は同じように臨まないといけないということです。単に叱責だけ、口だけではありません。鞭もあります。私たち信仰者は、父なる神がこのような方であることを知っています。私たちが主の御言葉だけでその叱責だけで聞くことができないなら、その愛のゆえに、大変な状況の中に入れたり、自分のしたことの結果を少し味わうようにさせることによって、その過ちや愚かさを自ら捨てることができるようにしていただきます。もし、懲らしめがないと、その人の自我は心の中で増幅し、膨張して、誰も制御することができなくなります。自分が中心になって回っていないと気が済まなくなってくるのです。

さらに興味深い点は 18 節、「幻」と訳されているところは、啓示と言い換えることができるものです。神からの幻、啓示が与えられていないと民がほしいままにふるまうということです。イスラエルは士師の時代、自分の目に正しいと思うことをやって、めいめいが勝手なことをしていました。イスラエルに与えられた神の啓示、幻を度外視していたからです。しかし、そんな中でも律法がその時に希望です。たとえ、他の人々がどんなに他の道に歩んでいようとも、主が語られたことに集中して、それに従っていくという勇気を持っている人は幸いです。

29:22 怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。29:23 人の高ぶりはその人を低くし、心の低い人は誉れをつかむ。

怒る者はなぜ怒るのか、それは高ぶり、プライドであるということです。ですから、怒る時はその怒りに任せるのではなく、主の前で静まり、主が何をお考えになっているのかを聞いていくことが必要です。

29:24 盗人にくみする者は自分自身を憎む者だ。彼はのろいを聞いても何も言わない。29:25 人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。29:26 支配者の顔色をうかがう者は多い。しかし人をさばくのは主である。29:27 不正な人は正しい人に忌みきらわれ、行ないの正しい人は悪者に忌みきらわれる。

24 節の盗人に与する人のことですが、「のろいを聞いても」とありますが、これは宣誓と訳すこともできます。つまり、証言台に立っても、話すことが何もないということです。その悪いことをかばっているのですが、公正明大なところに立てば何も言えなくなります。

そして午前礼拝で学んだ 25 節がありますが、これが 26 節につながる言葉です。つまり、相手がどう思うのか、その顔色を伺っているのです。人がどう思っているのかを気にするのは罫であることを学びましたが、それに対する治癒は主への信頼です。そして主への信頼というのは、神ご自身が全てを裁いてくださるといふところにある信頼です(1コリント 4:3-4)。他の人がどう見ているかではなく、主がどう見ておられるのかを気にします。

そして最後の 27 節は、同じ原則が書かれています。不正な人と正しい人は相容れません。そこには中庸はないのです。箴言を読むと、本当に中庸はないことに気づきます。これは、分裂や分派を奨励しているのではなく、悪に対しては悪であり、そこには妥協がないということです。悪があるというのにそうではない、と主張することについて、イエス様は何と言われましたか？「ヨハネの 9:41 もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える。』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」

2A 王の得た教訓 30-31

1B 分をわきまえた知恵 30

1C 御言葉への信頼 1-6

30:1 マサの人ヤケの子アグルのことは。イティエルに告げ、イティエルとウカルに告げたことは。

最後の二章、30 章と 31 章に入ります。ここは、ソロモンの書いたものではなく、「アグル」という人が書いたものです。「マサの人」とありますが、日本語訳では特定の地名のように訳しています。けれども、元々のヘブル語は「宣告」と訳すことのできる言葉です。つまり、「宣告をする人、ヤケの子アグルの言葉」と訳すことができます。

30:2 確かに、私は人間の中でも最も愚かで、私には人間の悟りがありません。30:3 私はまだ知恵も学ばず、聖なる方の知識も知らない。30:4 だれが天に上り、また降りて来ただろうか。だれが風をたなごころに集めたでしょうか。だれが水を衣のうちに包んだでしょうか。だれが地のすべての限界を堅く定めただろうか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。

これまでの箴言の言葉に対して、謙虚に応答しているかのような言葉です。私こそが愚かで、悟りがないと告白しています。そして、聖なる方の知識も知らないと言っています。その根拠が、天地創造の不思議です。ここは、ヨブ記において主なる神がヨブにご自身を現された時に似ています。天地を造られ、今もその水の循環を支配しておられる神について、そこにある知恵を誰が悟ることができようか、ということです。圧倒的な神の知識に対して、私は愚かであるとへりくだっています。

ところで、ここで驚くべき証言があります。「その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。」という言葉です。天地を創造された方の名は誰なのか、そしてその子の名は誰か？と言っています。創造主であって、この方に子がおられることの証言です。エホバの証人のように、イエスが神の御子というのは、神によって創造された被造物だということではなく、創造主でありながら御子であることを証明している箇所です。

30:5 神のことは、すべて純粋。神は振り頼む者の盾。30:6 神のことはつけ足しをしてはならない。神が、あなたを責めないように、あなたがまやかし者とされないように。

アグルは、圧倒的な神の天地創造の知識によって自分には、全く知識がないことを告白した後で、それで唯一、神が人に理解できるように授けてくださった御言葉であり、これに拠り頼まなければいけないことを悟っています。私たちの理解では、神が命じられたことについて、「これは聞けない、私の気持ちや信条にあわないから。」と言ってしまいます。そして、「もっと他にも、大事なことがあるだろう。」として、付け足してします。へりくだりが必要です。へりくだりは、このように私たち人間は知識について全く欠けている、だから神の言葉にのみ拠り頼む、としています。

2C へりくだり 7-14

30:7 二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。30:8 不真実と偽りとを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。30:9 私が食べ飽きて、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないために。また、私が貧しくて、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないために。

アグルは自分の弱さをわきまえています。一つは、不真実と偽りから遠ざけてくださいと祈っています。人は自分の犯している悪を認めないために、あらゆる手を使って偽り事をいう、こうした悪い性質を自分も持っていることを知っています。そしてもう一つは、財産についてです。ここは興味深いことですが、貧しい人が陥る過ちと富んだ人が陥る過ちのどちらもが、箴言に書かれていました。そのどちらにもならないように、富ませることもなく貧しくさせることもないようにしてください、と願っています。要は財産のことで、それが中心になって、主によって生きることがなおざりになることを彼は恐れています。

30:10 しもべのことを、その主人に中傷してはならない。そうでないと、彼はあなたをのろい、あなたは罰せられる。

「他の人たちのことは、主に任せなさい。」ということです。自分が立ち入って、関わってはいけないということです。同じような原則でパウロは、教会の人たちに戒めを与えました。「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。(ローマ 14:4)」

30:11 自分の父をのろい、自分の母を祝福しない世代。30:12 自分をきよいと見、汚れを洗わない世代。30:13 なんとも、その目が高く、まぶたが上がっている世代。30:14 歯が剣のようで、きばが刀のような世代。彼らは地の苦しむ者を、人のうちの貧しい者を食い尽くす。

四つの憎むべき世代です。両親を敬わない世代、自分を正しいとする世代、高慢な世代、そして14節、いじめの世代です。何か今日を言い表しているかのようです。パウロも終わりの日には困難な時代になり、「自分を愛する者」が出てくるとありますが、権威ある者がないがしろにし、自分を神とし、正しいと言い張り、そして自分の気持ちにそぐわないと相手を引き落とそうと必死になる。自分自身

が偶像となっている時代です。

3C 四つの格言 15-33

15 節から、「四つの格言」があります。三つある、といいながら、いや四つあると言うことによって、一つの格言について四つの興味深い例えを出します。

30:15 蛭にはふたりの娘がいて、「くれろ、くれろ。」と言う。飽くことを知らないものが、三つある。いや、四つあって、「もう十分だ。」と言わない。30:16 よみと、不妊の胎、水に飽くことを知らない地と、「もう十分だ。」と言わない火。30:17 自分の父をあざけり、母への従順をさげすむ目は、谷の烏にえぐりとられ、わしの子に食われる。

飽くことが知らない、つまり貪ることですね。陰府、つまり死んでいく人です。火葬場にいけば、決して休まることはないことを知らせてくれます。不妊の胎、つまり子を宿したいと願う母の思いです。ヤコブの妻、レアとラケルのことを思い出します。それから、火も火事を見たら、あらゆるものを飲み尽くしますね。そして、そうした自分が欲しい、自分を満たせ、そうした利己的な欲望の究極が、両親をあざけり、さげすむということにあります。へりくだり、従順になる最後の砦である親の権威をあざけるわけです。

30:18 私にとって不思議なことが三つある。いや、四つあって、私はそれを知らない。30:19 天にあるわしの道、岩の上にある蛇の道、海の真中にある舟の道、おとめへの男の道。30:20 姦通する女の道もそのとおり。彼女は食べて口をぬぐい、「私は不法を行なわなかった。」と言う。

興味深いですね、19 節の最後、「おとめへの男の道」つまり男女の恋愛というのは、とても不思議なもので、なんでそうなるか分からないということです。そして 20 節も不思議ですが、姦通する女はなぜか、「不法を行なわなかった」と開き直ると言います。ご飯を食べながら平然と言えるので、罪意識がないのです。

30:21 この地は三つのことによって震える。いや、四つのことによって耐えられない。30:22 奴隷が王となり、しれ者がパンに飽き、30:23 きらわれた女が夫を得、女奴隷が女主人の代わりとなることによって。

支配されるべき人が支配者となることの耐え難き状態です。整えられていない人が王となれば、そこにある権力と富への取り扱いが全く分からない状態です。そして、しれ者、あるいは愚か者が、本来なら寄る辺のない人に分け与えるべきパンを、私腹を肥やすために使います。そして、箴言には争い好きな女が書かれていましたが、自分の必要だけを通して仕えることを知らない人は、結婚する資格がないのに結婚したら悲惨です。そして、女奴隷が女主人になったら、とてつもない虐待といじめを行なうことでしょう。つまり、主に召されて、主に選ばれた人、整えられた人を神はその

位置に置きます。そうでない人は、その与えられた分で、それをわきまえて主に仕えます(ローマ 12:3)。

30:24 この地上には小さいものが四つある。しかし、それは知恵者中の知恵者だ。30:25 蟻は力のない種族だが、夏のうちに食糧を確保する。30:26 岩だぬきは強くない種族だが、その巣を岩間に設ける。30:27 いなごには王はないが、みな隊を組んで出て行く。30:28 やもりは手でつかまえることができるが、王の宮殿にいる。

知恵者中の知恵者ということで、ここを午前礼拝の説教本文にしたかったほどであります。アグルの謙遜から、このような小さな被造物から神の偉大な知恵を学び取っています。それぞれが、とても弱い存在です。私たちがまず、自分が弱い存在であることを悟ることが知恵の始まりです。

一つは、「蟻」です。蟻から学ぶのは「将来のために備える」ことです。永遠の御国のために、たった今の生活を用いているのか？ということでもあります。不正の管理人の例えが、まさにそれです。彼は今、自分が持っているもので、将来、解雇された後に自分を拾って雇ってくれるところを用意しました。私たちがどこまで、今、自分の持っている力で神の国に入るための備えをしているのでしょうか？世のことについては、とても賢く動ける私たちですが、いざ靈的なこと、教会となると、たった今のことしか考えていないということがありますね。

次に、「岩だぬき」です。岩だぬきは、シリアハイラックスと呼ばれており、ウサギ程度の大きさしかありません。けれども、岩間にその巣を設けているので外敵から身を避けることができます。詩篇に、その他の箇所にも、何度も何度も神が私たちの救いの岩であることが書かれています。岩だぬきにその知恵が隠されています。私たちは、「自分でできる」と思ってしまい、主の中に隠れることについて、「自分はそんな弱い存在ではない」と言い張ります。いいえ、主の御名の中に隠れ、神の恵みに拠り頼むのです。

そして「いなご」です。いなごの群れによって、一帯が猛打撃を受けます。彼らに指揮系統はありません。彼らが行なっているのは、ただ一緒に動くことです、協力することです。ここの知恵は、キリスト者が一つになることです。それがどれだけ大きな力になるのかを知らずに、私たちはそれぞれの違いで別れて動いています。しかし、一人の魂の救いは、チーム・ワークを通して起こされています。

そして「やもり」です。やもりは、どんなことでも吸引力のある足によって這っていくことができます。それで王の宮殿の中に入ることができます。手によって取り上げることのできるような存在が、まるで王の宮殿に住んでいるかのような富と栄光を手に入れているということです。私たちはまさに、やもりです！主イエス・キリストにある者は、神の御国の栄光の富を受け継ぐことになっているのです！この御国に入る時まで、どうかあきらめずに、忍耐をもって走ってください。

30:29 歩きぶりの堂々としているものが三つある。いや、その歩みの堂々としているものが四つある。
30:30 獣のうちで最も強く、何ものからも退かない雄獅子、30:31 いばって歩くおんどりと、雄やぎ、
軍隊を率いる王である。30:32 もし、あなたが高ぶって、愚かなことをしたり、たくらんだりしたら、手
を口に当てよ。30:33 乳をかき回すと凝乳ができる。鼻をねじると血が出る。怒りをかき回すと争い
が起こる。

24-28 節にある小さき者たちに対照的に、堂々としている存在があります。雄獅子、雄鶏、雄山羊、
そして軍隊を率いる王です。それで、私たちはもし、小さき生き物から学ぶのではなく、このような
堂々とした存在であるかのごとく、高ぶったり、愚かなことをするなら、どうなるかという、争いを引
き起こすのだということです。手を口に当てて、自分の領域ではない、ただ神の憐れみを待ち望むべ
きなのだということを知るべきなのです。

2B 母からの言葉 31

1C 女と酒 1-9

31:1 マサの王レムエルが母から受けた戒めのことば。

ここも31章1節と同じく、「マサ」というのは「宣告」という意味を持っているので、どこかの地名では
ないかもしれません。そして、王レムエルに対して母が受けた戒めの言葉です。箴言の最後が、父か
らではなく母からの戒めで終わり、かつ女についての戒めであるというのは興味深いです。箴言の始
めに父が戒めを与え、そして終わりに、母がそばで戒めを与えてます。

31:2 私の子よ、何を言おうか。私の胎の子よ、何を言おうか。私の誓願の子よ、何を言おうか。31:3
あなたの力を女に費やすな。あなたの生き方を王たちを消し去る者にゆだねるな。

女から離れることについては、箴言の始め1章から9章までの多くに書かれていました。そして10
章以降にも、争い好きな女といっしょにいることがいかに悲惨かを書いていました。それを母も強調し
ています。

31:4 レムエルよ。酒を飲むことは王のすることではない。王のすることではない。「強い酒はどこだ。」
とは、君子の言うことではない。31:5 酒を飲んで勅令を忘れ、すべて悩む者のさばきを曲げるとい
けないから。31:6 強い酒は滅びようとしている者に与え、ぶどう酒は心の痛んでいる者に与えよ。
31:7 彼はそれを飲んで自分の貧しさを忘れ、自分の苦しみをもう思い出さないだろう。31:8 あなた
はおしのために、また、すべての不幸な人の訴えのために、口を開け。31:9 口を開いて、正しくさば
き、悩んでいる人や貧しい者の権利を守れ。

酒に対する戒めです。強い酒についての戒めはすでに読みましたが、ここでは王が人々の裁きをし
る時に妨げになるから、避けなさいと勧めています。酒というのは、自分の貧しさや苦しみに対す

る痛みを感じさせないようにするだけのものであり、御霊による判断、知恵や知識とは相いれないものです。そして王は絶えず、悩んでいる人、貧しい者の権利を守るほうについていないといけません。

2C しっかりとした妻 10-31

1D 収益 10-27

31:10 しっかりとした妻をだれが見つめることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。
31:11 夫の心は彼女を信頼し、彼は「収益」に欠けることがない。31:12 彼女は生きながらえている間、夫に良いことをし、悪いことをしない。

10 節から、箴言の締めくくりである「しっかりとした妻」であります。かつての詩篇 119 篇などにあっただように、ここはアルファベットの詩になっています。文頭がアレフ、ベット、ギメル・・・と、ヘブル語のアルファベット順になっており、これを読み、覚えるのに分かりやすくなっています。

これから読むと分かりますが、彼女がなぜしっかりとしているかと言いますと、その勤勉さであります。それは外での働きのみならず、家事も含めてです。そして生活におけるバランス、節度、そして弱った人々に対する憐れみがあります。「収益」に欠けることはない、とあります。聖書に出てくる優れた女性と言うと、リベカをまず思い浮かべますが、アブラハムのしもべがイサクの嫁を探しに来た時に、彼女はらくだ十頭に水を飲ませるために、水を汲んでいました。そして、実際に「しっかりとした女」と呼ばれた人は、ルツです(3:11)。彼女も勤勉でした。落穂拾いをしました。聡明な女性としてはアビガイルがいますが、彼女も家のことをしっかりと見ていた人です。聖書は、私たちが女性として優れている、とする基準とかなり違うものを提供しています。

31:13 彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、喜んで自分の手でそれを仕上げる。31:14 彼女は商人の舟のように、遠い所から食糧を運んで来る。31:15 彼女は夜明け前に起き、家の者に食事を整え、召使の女たちに用事を言いつける。31:16 彼女は畑をよく調べて、それを手に入れ、自分がかせいで、ぶどう畑を作り、31:17 腰に帯を強く引き締め、勇ましく腕をふるう。31:18 彼女は収入がよいのを味わい、そのともしびは夜になっても消えない。31:19 彼女は糸取り棒に手を差し伸べ、手に糸巻きをつかむ。

勇ましく家計をやりくりしている姿です。家の人々が着る物については、自分が裁縫します。そして市場に行って買い物するのも、自分が行います。家計の計算も夜遅くなっても続けます。そして自活すべくぶどう畑も作ります。これまで私たちが学んできた、勤勉の姿そのものです。

31:20 彼女は悩んでいる人に手を差し出し、貧しい者に手を差し伸べる。

彼女の勤勉さは、決して弱い人を退けるものではありません。むしろ、このような人たちのために汗を流して働くという姿勢です。

31:21 彼女は家の者のために雪を恐れない。家の者はみな、あわせの着物を着ているからだ。
31:22 彼女は自分のための敷き物を作り、彼女の着物は亜麻布と紫色の撚り糸でできている。
31:23 夫は町囲みのうちで人々によく知られ、土地の長老たちとともに座に着く。

蟻の知恵です。雪が降る時も、それに備えることができるよう初めから防寒用の着物や寝る時の敷布を作ります。そして夫は役人です。その働きを彼女は支援しています。

31:24 彼女は亜麻布の着物を作って、売り、帯を作って、商人に渡す。31:25 彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。31:26 彼女は口を開いて知恵深く語り、その舌には恵みのおしえがある。31:27 彼女は家族の様子をよく見張り、怠惰のパンを食べない。

自分で作った着物は、生計の足しになるように商人にも売ります。そして力と気品を身に付けています。ほほえみながら「後の日を待つ」と言っていますが、これが知恵の特徴です。後に良きものが現われる、というものです。そして彼女の語ることがあり、それは知恵であり、恵みの教えでした。そして、箴言には羊の群れに注意しなさいという戒めがありましたが、ここで家族の様子をよく見張っているとあります。怠惰の罪を犯していません。つまり、これだけ裕福であれば、普通であれば安逸とわがまま、浪費と遊びに流れるところなのに、与えられた機会を生かしています。

2D 誉れ 28-31

31:28 その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言ひ、夫も彼女をほめたたえて言う。31:29 「しっかりしたことをする女は多いけれど、あなたはそのすべてにまさっている。」と。31:30 麗しさはいつわり。美しさはむなし。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。31:31 彼女の手でかせいだ実を彼女に与え、彼女のしたことを町囲みのうちでほめたたえよ。

夫は彼女を、町囲みでほめたたえると言っていますが、つまり門のところでほめるということです。これは、女性にはありえない話ですが、彼女は男女問わず、性別を越えて人間として通じる気品を備えているからです。女性だから、という言い訳、あるいはそれを悪い意味での武器とするのは、ここに書いてある「麗しさ」「美しさ」であります。麗しさというのは、女性の可愛らしさと言えるでしょう。話し方や身振りやそういったものです。そして美しさは、そのまま美貌のことです。これらはその人の内実とは異なる「偽り」にもなるし、また中身のない「空しさ」にもなります。しかし、それに頼るのではなく、男にも求められている「**主への恐れ**」が彼女にはあるのです。

箴言 9 章において、知恵は女性形でした。そして息子に対してソロモンは、「知恵に向かって、「あなたは私の姉妹だ」と言え、と言いました(7:4)。何を自分が最も慕っているのか、その恋慕う対象が知恵となりなさい、ということです。